科目区分　学部：特別支援教育教員養成課程

授業科目　言語・コミュニケーション発達論

特別支援教育講座　花熊　曉
受講者数　24 名

１．授業の目的

特別支援教育免許制度変更に伴う授業カリキュラムの改編で、本年度より、前年度までの「言語の発達とその障害」（２回生）と「(旧）言語・コミュニケーション発達論」（３回生）の２つの授業で取り扱っていた内容を「(新）言語・コミュニケーション発達論」（３回生）として、１つにまとめる必要が生じた。

言語・コミュニケーションの発達過程を理解する上で必要な基礎知識を論じる「言語の発達とその障害」の授業内容と、発達障害児に見られる言語・コミュニケーションの困難を理解する上で重要なより専門的な内容を論じる「(旧）言語・コミュニケーション発達論」の授業内容を、従来の半分の時間（60 時間→30 時間）で論じることは難しく、授業の内容や到達目標の設定について、担当教員としても悩むことが多かった。そのため、本年度の授業にあたっては、試行錯誤的にならざるを得ない面があったが、以下のような授業方針で臨むことにした。

(1)受講生が、１・２回生の段階で言語・コミュニケーション発達に関する授業を受けていないことを考え、①言語・コミュニケーション発達に関する基本的な用語・知識・理論を身につけること、②前言語期から就学期までの言語・コミュニケーションの発達過程について知ること、の２つを主たる授業目標とする。

(2)言語・コミュニケーション発達の障害とその支援については、(1)を論じる中で、発達障害児に見られる発達上のつまずきや困難についても触れる。また、言語・コミュニケーション障害の支援の実際については、教員養成実地指導講師の担当時間に論じてもらうようにする。

２．授業の内容と授業を行う上での工夫

15 コマ 30 時間の授業を、①言語の特性と働きについて知る、②言語習得の諸理論について知る、③言語・コミュニケーションの発達過程について知る、④言語・コミュニケーションの発達支援の実際について知る（教員養成実地指導講師）の４つのパートに分けて論じた。①～③では、ヒトの言語・コミュニケーションの特質とその発達過程についての課題意識を持てるように、小グループによる討議・発表の機会を３回設けた。また、言語・コミュニケーション発達に関する基本的な用語・知識が確実に身につくように、重要な用語や概念については「用語解説」の資料を用意し、授業内で必ず確認するようにした。さらに、③については、乳幼児と接する機会が少ない受講者の状態を考慮して、乳幼児とのコミュニケーション場面を撮影したビデオを多く用いて、具体的なイメージが持てるようにした。

３．受講者について

本授業の受講者は、特別支援教育教員養成課程（聴言コース、発達障害コース）の３回生 23 名と学校教育教員養成課程の３回生１名の計 24 名である。

４．授業評価アンケートとその結果

学生による授業評価は、ア）授業の内容への関心と理解に関するもの：３項目、イ）教員養成実地指導講師の授業に関するもの：１項目、ウ）授業の進め方に関するもの：３項目、エ）授業への感想と改善意見：自由記述、の計８項目からなる授業評価アンケートを授業終了時に実施した。エ）を除く７項目中６項目は５段階評価、１項目は３段階で評価してもらった。

（ア）授業内容への関心と理解について

項目１「授業の内容に興味・関心を持つことができたか」については、“非常に”と答えた者が 13 名、“かなり”と答えた者が 11 名であった。

項目２「乳幼児から就学期に至るコミュニケー

ションと言語の発達過程を理解できたか」については、“非常に”と答えた者が２名、“かなり”と答えた者が 16 名で全体の 3/4 を占めていたが、“どちらとも言えない”と答えた者５名、“あまり”と答えた者も１名いた。

項目３「本授業の内容は、受講者が今後、コミュニケーションと言語の発達に障害のある子どもの理解とについて学ぶ上で役立つ内容だったか」については、“非常に”と答えた者が 11 名、“かなり”と答えた者が 11 名、“どちらとも言えない”と答えた者２名であった。

結果に見られるように、項目１と３については、“興味が持てた”“役立つ内容だった”とする回答が多く、授業内容の設定それ自体は適切だったと思われるが、授業内容の理解に関しては 1/4 の受講者の理解に関する評価が十分ではなく、受講者全員の授業内容理解をどう高めるかが今後の課題として残った。

（イ）教員養成実地指導講師による講義について

項目４「教員養成実地指導講師による講義に興味・関心が持てたか」、“非常に”と答えた者８名、“ある程度”と答えた者 14 名、“どちらとも言えない”と“あまり”が各１名であった。

本授業における教員養成実地指導講師の講義は、本来２コマ４時間で設定されていたが、予算の問題から１コマ２時間に削減された経緯があり、講師からも「１コマだけでは、発達支援の実際について十分に伝えきれない」との指摘を受けている。学生の評価は概ね肯定的であるが、“どちらとも言えない”“あまり”と答えた受講者が２名いたことには、時間数の問題も関係していると考えられる。

（ウ）授業の進め方について

項目５「教員の説明のしかたやプレゼンテーションのしかたは適切だったか」については、“非常に”と答えた者 16 名、“かなり”と答えた者８名であった。

項目６「授業で配布した資料の内容や量は適切だったか」については、“非常に”11 名、“かなり”11 名、“どちらとも言えない”２名であった。

項目７「グループ討議についての感想」では、“討議の内容・回数は適切”が 20 名、“討議の回数を増やすべきだ”４名、“討議は必要ない”０名であった。

以上の結果から、授業の進め方については、概ね適切だったと判断される

（エ）授業への感想と改善意見：自由記述

授業に対する肯定的な感想として最も多かったのは、「乳幼児のビデオを多数見ることができて、乳幼児がどのようにコミュニケーションしているのかがよく理解できた」というものであった。また、「教員養成実地指導講師による支援事例の提示が大いに役立った」とする感想も多かった。

一方、授業の改善すべき点としては、「言語・コミュニケーション発達の障害について、もっと多く論じてほしい」という意見が数名の受講者から挙げられていた。

５．授業の評価と課題

カリキュラム改変による授業内容・時数の大幅変更で、授業担当者として内容設定に悩んだ授業であったが、授業評価アンケート結果が示すように、受講学生の評価は概ね肯定的なものであった。特に、小グループによる討議・発表という参加型の授業形式を取り入れたことと、乳幼児のコミュニケーション行動に関する具体的なイメージを持つためにビデオ教材を多く用いたことには、受講者の評価も高く、次年度以降の授業でも採択すべき授業の進め方であると考える。

その一方、1/4 の受講者が「授業内容の理解が十分ではない」と回答した事実には、60 時間をかけて講義していた内容を 30 時間にまとめざるを得なかった問題が影響していたと思われる。カリキュラム改変上やむを得ないことではあるが、少ない講義時間の中で、言語・コミュニケーション発達支援に必要な知識をどう効率よくまとめ、伝達していくかが課題である。

同様に、「言語・コミュニケーション発達の障害について、もっと多く論じてほしい」という学生の改善意見にも、授業時間数の問題が反映されている。言語・コミュニケーション障害の理解に必要な基礎的内容（定型発達の過程の理解）と障害の理解と支援の実際に関する内容のバランスをどのように図っていくかも、今後の大きな課題である。

次年度に向けての改善案としては、次のような方策が考えられる。

①言語・コミュニケーションの定型発達過程を論じる中に、各発達段階での発達上のつまずきとその支援に関する内容をできるだけ多く取り入れる。

②言語・コミュニケーションの定型発達過程に関する内容のうち、自己学習が可能なものについては「授業時間外学習」の課題とし、受講者自らが調べ、理解できるようにする。